

## 大学生の適応過程に関する縦断的研究 (1)<sup>1)</sup>

吉田俊和 橋本剛<sup>2)</sup>  
安藤直樹<sup>3)</sup> 植村善太郎<sup>3)</sup>

### 研究の概要<sup>4)</sup>

#### 問題

大学が大きく変貌し始めている。1960年代半ばまでの大学は“知の最高学府”であり、一部の知的エリートと少数の富裕階層の子弟だけを教育していればよかった。ところが、わが国の大学進学率は、1960年代後半から上昇し続け、現在では同世代の約半数が大学や短大に進学している。こうなると、小・中・高校における教育と同じように、大学教育も社会からのニーズや期待に応えることが必要となってきた。その流れの中で出てきたのが、大学設置基準大綱の弾力化(1992)である。各大学は、創意と工夫で自由に科目等を決められる代わりに、授業シラバスの作成、学生からの授業評価を導入し、自己評価、自己点検に努めるようになった。つまり、「大学生は自立した大人だから、自ら学べばよい」という論理は通用せず、大学は学生の満足度を高めるような授業を提供する必要が生じてきた。さらに、最近の大学審議会報告では、「学生のゼミ活動やサークル活動を円滑に機能させるために、大学教員はその核作りをサポートすべきである」という答申が出されるような時代になってきた。

従来、わが国の大学教育についての研究といえ、教育学的な理念や教育内容に関するものが多く、心理学的

な実証研究は多くない。一方、1950年代から大学の 대중化が進んだアメリカ合衆国では、同時に、大学生に関する心理学的な研究も始まった。例えば、Lehmann(1963)は、ミシガン州立大学の新生が卒業するまでの間に、クリティカルシンキング能力、ステレオタイプの信念、伝統的価値志向性などを、どのように変化させるかについて研究している。わが国でも、断片的には大学教育や大学生に関する実証的研究が行われてきた。比較的早くから知られているのは、大学入試の成績と入学後の成績を追跡調査し、入学試験の妥当性をみようとしたものがある(續, 1964)。入学試験関連では、1979年度から国公立大学に導入された共通一次試験制度(センター試験の前身)が、教員養成大学の新生に与えた影響調査が行われている(岩井, 1979; 1980; 1981; 1982; 1984)。彼は一連の研究で、受験の志望動機や併願大学、家庭の教職観、教員への適性に対する自己認知、卒業後の進路希望などを調査し、平均して25%前後の不本意入学者が存在するを見いだしている。そして、それらの学生に小・中学校教員を積極的に志望するよう教育するのか、あるいは教員以外への就職の道が開けるような教育をするのか、どちらが大学の使命であるかを十分検討する必要があることを指摘している。同様の趣旨の調査は、他大学の教員養成学部でも実施されている(吉田・下村, 1989)。

また、マスプロ教育の弊害や大学レジャーランド化が叫ばれた(矢倉, 1984)ころ、大学教育を改善していくためには、教師-学生の間関係を構築することが重要であるとした研究もみられた(大橋・吉田・坂西, 1982; 吉田・坂西, 1984)。彼らの研究によれば、学生の持つ対教師態度は「敬して遠ざける」式のものであり、現実レベルでほとんど接触関係を持っていないだけでなく、接触願望もない。これに対し、教師は学生が持っている態度をより肯定的な方向で推測し、とくに接触関係の認知には大きなギャップがある。しかし、学年が進むにつれ、ゼミの指導教師との接触願望や現実の接触は増加する。接触が疎遠な学生は、密接な学生と比べると、学生

1) 本研究の一部は、著者に加えて廣岡秀一(三重大学教育学部)・高井次郎(名古屋市立大学人文社会学部)・山中一英(兵庫教育大学学校教育学部)・石田靖彦(愛知教育大学教育学部)・小川一美・北折充隆・坂本剛・元吉忠寛・多川則子(以上名古屋大学教育学研究科)による共同研究の一部である。なお、本研究の一部は日本教育心理学会第41回総会において発表された。

2) 日本学術振興会特別研究員・名古屋大学教育学部

3) 名古屋大学教育学研究科

4) 執筆者: 吉田俊和

生活を積極的に生きようとする姿勢が弱く、勉学より、個人的な趣味やアルバイトを重視する傾向がある。このほか、新設学科のカリキュラム評価を多面的に見ようと試みた研究もある(吉崎・廣岡, 1994)。

広い意味で大学教育を考えた場合、もっとも研究が多いのは、大学生の精神的健康に関するものである。学生相談の立場からは、無気力学生(アイデンティティの拡散)の留年問題などが、早くから指摘されていた(笠原・山田, 1981)。実証的な研究として、たとえば藤井(1998)は、大学生活不安尺度を作成し、女子学生の方が不安がやや高いこと、日常生活よりも学業に対する不安が高いこと、学年が上がるほど不安は下がることを見いだしている。大学新入生の孤独感を扱った研究では、自宅生が既存の交友関係を維持できるのに対し、下宿生は新たな生活事態で交友関係の形成を活発に行い、孤独感を低減させようとしていることが報告されている(諸井, 1986)。また、不安や孤独感に代表される不適応傾向を抑制・緩衝する要因として、ソーシャルサポート(橋本, 1997a; 緒賀, 1991; 嶋, 1992)や、ストレス対処方略(尾関・原口・津田, 1991; 和田, 1998)などが検討されている。

上述してきたように、大学教育や大学生に関する断片的な研究は見られるが、いずれも特定の観点から行われており、大学教育や大学生の全体像を扱ったものではない。それゆえ、本研究は、現実の大学生が何を考えて大学に進学し、どのような大学生生活を送り、何を学んで卒業していくのか、という大学生の社会化のプロセス全体を検討する。こうしたプロセスを教育心理学的に探求することは、今後の大学教育を改善していく上で、基礎的資料を提供する重要な研究といえよう。そこで本研究は、大学入学後の4年間、縦断的に種々の調査を実施し、様々な要因間の関連から、彼らの社会化のプロセスである適応過程を明らかにすることを目的とする。なお、本研究は第一報であり、2年分のデータについて、研究Ⅰでは学問に対する態度を中心に、研究Ⅱではライフイベントと社会的スキルの関連性について、研究Ⅲでは職業に関する自己の能力評価と職種への適性認知を報告する。

## 方法

### 調査対象

1997年4月に国立A大学教育学部へ入学した学生71名(男性25名、女性46名)である。教育学部でも教員養成が目的ではなく、学生は教育学と心理学を主とした発達科学を学ぶ。入学時の年齢は18歳-21歳。自宅生45名、下宿生26名。学生は便宜的に2クラスに分けられ、担当教官がクラス担任の形で1名ずつ割り当てられる。1年

次は共通教育が主体であり、学部専門科目の必修授業は前後期それぞれ3コマずつである。1年次前期の必修授業において、調査の全体計画を詳細に説明し、理解と協力を求めた。2年次からは共通教育と学部の必修授業および専門授業の割合は半々程度になる。2年次の後期からは、教育学系3コース(生涯教育開発、学校教育情報、国際社会文化)と心理学系2コース(心理社会行動、発達教育臨床)にそれぞれ分属する。分属は、原則として本人の希望を優先する。教育学系は、3年次前期から指導教官が特定されるが、心理学系は、後期の課題研究からである。両系とも、4年次に若干の指導教官変更が行われる。大学生一般を代表する調査対象ではないとの批判があるかもしれないが、4年間の縦断調査となると、ある程度協力体制が可能な集団とならざるをえない。事例的なデータと解釈すべき点もいくつか出て来ると考えられる。

### 調査内容

1. 学問に対する態度……入学動機、教育学や心理学に対するイメージ測定、分属コースに対する認知など、授業内容や教官と接することにより、学問アイデンティティがどのように確立していくかについて明らかにする。調査時期により異なり、それぞれ独自に作成した項目を使用した。
2. 集団アイデンティティ……大学や学部に対する同一性の変化を見る。Karasawa(1991)を参考にして作成した7項目。
3. 社会的スキル……社会適応のための対人スキル獲得過程を検討する。Takai & Ota(1994)の日本的コミュニケーション・スキル尺度をベースに独自の項目を加えた30項目。
4. ライフイベント……生活経験の有無を調べるため、久田・丹羽(1987)の大学生用生活体験尺度から50項目を選択した。3回目の調査から2項目追加した。
5. 職業に関する尺度……4年間でどのような職業選択に辿り着くかを、職業志向性28項目と、自己能力評価19項目(ともに若林・和田・斎藤, 1987)、職種に対する自己の適性認知21項目の変化から捉える。
6. クリティカルシンキングに関する尺度……大学4年間の学習成果指標の一つとして、“事象をさまざまな角度から見る”が可能になる。これを検討するため、認知欲求尺度15項目(神山・藤原, 1991)、クリティカルシンキングに対する志向性(宮元・道田・谷口・菊池, 1996)<sup>5)</sup> 30項目、批判的思考力テスト(久原・井上・波多野, 1983) 20項目と自由記述によるクリティカルシンキング課題2題を用いた。

7. 人間観……4年間の対人経験が人間に対する見方や信頼感にどのような影響力を持つかを検討する。Wrightsman (1991) の尺度をベースに独自の項目を加えた56項目。

8. メンタルヘルス……中川・大坊 (1985) の GHQ28 を使用し、特定時点での精神的健康度をチェックした。

9. ソーシャルネットワーク……松崎・田中・古城 (1990) の SSQ9 を使用した。9つの質問に対して、その時点における利用可能なソーシャルサポート提供者の人数と、そのことについての満足度を尋ねた。なお人数については、1年次は学部のネットワークを一括して、2年次は教育学系と心理学系それぞれのネットワークについて別個に質問したので、1年次の調査では全18項目、2年次は全27項目となる。

それぞれの詳しい項目は、各尺度が利用される研究に記載されるので、参照していただきたい。

#### 実施経過

これまでに1年次5回の質問紙調査と1回の面接調査、2年次4回、3年次1回の質問紙調査を実施した。1年次の3回は講義時に、それ以後は、学生に依頼して配布してもらい、ボックスで回収した。調査の性格上、記名式で回答してもらった。以下に、実施時期と調査内容を示す。

1. 1997年4月……学問に対する態度、認知欲求とクリティカルシンキングに対する志向性、社会的スキル、集団アイデンティティ。
2. 1997年5月……人間観、ライフイベント。
3. 1997年7月……批判的思考力テスト。
4. 1997年7月……個人面接（現在の大学生活について）。
5. 1997年11月……職業に関する3尺度、ライフイベント、集団アイデンティティ。
6. 1998年1月……学問に対する態度、ソーシャルネットワーク。
7. 1998年4月……メンタルヘルス、ライフイベント。
8. 1998年7月……学問に対する態度、職業志向性
9. 1998年11月……認知欲求とクリティカルシンキングに対する志向性、ライフイベント、ソーシャルネットワーク。

5) D'Angelo (1971) を参考に、宮元らが作成したものである。ただし、日本版を作成するに当たって、項目分析等の尺度構成は行われていない。また、本研究では、作成者である宮元博章氏（兵庫教育大学助手）の許可を得てこの尺度を使用している。

10. 1999年1月……学問に対する態度、社会的スキル、集団アイデンティティ。

11. 1999年5月……クリティカルシンカーのイメージ、クリティカルシンキングと関連する指標、ライフイベント、メンタルヘルス。

## 研究 I 大学生の学問への態度に関連した諸変数の検討<sup>6)</sup>

— 学習への取り組み、対人関係、そして大学への同一性の相互連関の検討を中心に —

### 目 的

本節での第1の目的は、大学新入生の入学時における学問的志向性を探ることである。具体的には、志望動機、受験前の情報収集量、高校時代の得意科目について質問を行なう。新入生の学問的志向を把握することは、教育実践の上でも有益であろう。

第2の目的は、学問に対するイメージ、大学生活での重視事項、大学への同一性の時間的変化を検討することである。大学のカリキュラムを消化していく中で、これらの変数がどのような変動を示すのかは、大学生の実態把握という観点から興味深い事項である。

第3の目的は、学習への取り組み、学部の友人との親密度、教官への親近感、大学への同一性、授業を受けての満足感、志望動機、学問イメージといった変数間の関連を検討することである。

Lave & Wenger (1991) は、技術、知識の学習は社会的実践共同体への正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation: LPP) であり、学習には実践共同体成員としての同一性 (identity) の形成が伴うと主張している。学習者は、共同体の周辺から参加し、熟練者とのかかわりを通して、集団成員としての同一性を形成し、実践活動に十全的参加 (full participation) を出来るようになる。その過程で、技術、知識の学習が進行していくとする。LPPを本研究に当てはめると、大学新入生は大学という社会的共同体への周辺の参加者とみなせる。そして、彼らが学業へ取り組み、知識を獲得していくことに、同僚としての友人との関係、熟練者としての教官との関係、そして大学への同一性が相互的影響を持つと考えられる。

また、自己カテゴリー化理論 (self-categorization theory) によれば、自己と他者は自己を含む集団 (自己カテゴリー) においてプロトタイプ的 (代表的、模範

6) 執筆著者：植村善太郎

的)属性を有する程度に基づいて評価される(Turner, 1987)。したがって、ある集団の成員としての自己カテゴリー化が生じている場合、そこでのプロトタイプに近づくように行動が方向づけられる。これに従うと、大学への同一性の形成は、大学でのプロトタイプの行動である学習への取り組みを促進する可能性がある。また、大学カテゴリーにおいて、最もプロトタイプ的である教官に対して、肯定的態度を持つようになると予測できる。

これらの議論を踏まえ、本節では、同僚としての友人、および熟練者としての教官の存在、そして大学への同一性の形成と、学習への取り組みとの関連を検討する。

ただし、Lave & Wenger (1991) は、LPPの観点から学校教育に関して論じることは控えており、事例としてあげているものの多くは、実践集団の中での技術習得に関するものである(例:産婆の徒弟制)。したがって、LPPという概念が、本研究にどの程度適合するかは分からない。また、本稿のデータでは、学習への取り組み、友人との関係性、教官との関係性は1回分のデータがあるのみなので、これらの変数の時間的変化は扱えない。したがって、この件に関しては、限定的な相関関係の報告になる。

## 方法

### 調査時期と調査項目

本節で使用するデータの採集時期は、1997年4月から1998年7月までで、被験者はこの間に1年生から2年生に進級している。調査項目は大まかに4つに分類できる。第1は、学問に関するもの(志望動機、学問イメージ、授業への満足感など)。第2は、大学生活での重視事項に関するもの。第3は、大学への同一性。第4は、対人関係に関するもの(学部の友人への親密度、教官への親近感など)である。

1997年4月 1) 高校時代の主要5教科に対する興味  
英語、国語、数学、社会、理科の5科目に対して、まったく興味がなかったから非常に興味があったまでの4件法で答えてもらった。

2) 大学志望動機 学問に興味関心があった、学力レベルがあっていた、親や教師にすすめられた、卒業後の就職のための4項目について、まったくあてはまらないからよくあてはまるまでの5件法で答えてもらった。

3) 教育学部で学ぶ学問に関する情報収集 受験前に教育学部で学ぶ学問についてどの程度情報を集めたか、どの程度職業と結びつけたか、教育学に関する本をどのくらい読んだか、心理学に関する本をどのくらい読んだかの4項目について、まったくなかったから非常にあったまでの4件法で答えてもらった。

4) 学問イメージ 教育学と心理学それぞれについて、「楽しい-つまらない」、「有用な-不用な」、「親しみやすい-親しみにくい」、「新しい-古い」、「いきいきとした-停滞した」、「やわらかい-かたい」のSD形容詞に7段階で評定してもらった。

5) 大学生生活での重視事項 ①重視度 「クラブ・サークル活動」、「友達づくり」、「幅広い教養を身につける勉強」、「学部の専門性を身につける勉強」、「アルバイトで収入を確保して、車を買ったり旅行に行くこと」、「ボランティアなどの社会活動」、「資格の取得」の7項目それぞれについて、4年間での大学生活での重視度を、まったく重視しないから非常に重視するまでの4件法で評定してもらった。②重視順序 「幅広い人とのつきあい」、「学問的専門性」、「社会的な視野を広げること」、「好条件の職に就くこと」の4つの事柄について、4年間の大学生活での重視順序を回答してもらった。

6) 大学への同一性 Karasawa (1991) の集団同一性尺度を参考に、大学への同一性の高低を測定する7項目からなる尺度を作成した。それぞれの項目に対して5件法で評定してもらった(項目例:あなたは自己紹介するとき、大学名をあげることがどのくらいありますか)。

1997年11月 大学への同一性 内容は1997年4月のものと同じ。

1998年1月 1) 学問イメージ 内容は1997年4月のものと同じ。

2) 大学生生活での重視事項 内容は1997年4月のものと同じ。

3) 対人関係に関する質問 ①友人重要度と人数 教育学部の友人、他学部の友人、大学外の友人という3つの友人カテゴリーに対する重要度を、合計100%としてそれぞれに何%かを回答してもらった。また、それぞれのカテゴリーに含まれる友人の数を回答してもらった。②友人関係の親密度 学部の友人とのつきあいの深さに関する7項目にまったくあてはまらないから非常によくあてはまるまでの4件法で答えてもらった(項目例:教育学部の同級生とは授業以外の面で個人的つきあいがある)。③教官への親近感 「教育学の教官に対してどのくらい親しみを感じますか」、「心理学の教官に対してどのくらい親しみを感じますか」の2項目に対して、まったくから非常にまでの4件法で回答してもらった。

4) 受講した授業 ①受講数 97年度の教育学、心理学に関する授業の受講数をたずねた。②授業満足感 教育学、心理学の授業への満足感を1項目ずつ設定し、4件法で答えてもらった。③学習への取り組み 教育学、心理学それぞれに対して、a) 授業以外での学習の程度、b) 友人と一緒に学習に取り組んだ程度、c) 学部の授

業に取り組んだ程度を4件法で答えてもらった。④教育学部のカリキュラムへの満足感 満足感に関する1項目に4件法で答えてもらった。

1998年7月 1) 学問イメージ 内容は1997年4月のものと同じ。

2) 大学生活での重視事項 内容は1997年4月のものと同じ。

## 結果と考察

### 高校時代の学問興味

主要5科目について平均点を算出したところ、英語、社会に対し興味が高く、理科に対しては興味が低い傾向が見て取れた (Table 1 - 1)。

Table 1 - 1 高校時代の主要5科目への興味 (4件法)

教科名	M	SD	N
英 語	2.83	0.83	71
国 語	2.48	0.81	71
数 学	2.56	0.92	71
社 会	2.92	0.94	71
理 科	2.24	0.87	71

このような傾向は、同じく文科系学部で調査された吉崎・廣岡 (1994) の結果とほぼ一致している。文科系に進む学生の多くは、高校時代にこのような学問的興味を持つかもしれない。

### 志望動機と入学満足感

志望動機としては、学問への興味・関心が最も高く、ついで学力レベルの適合への評定値が高かった。親や教師にすすめられた、卒業後の就職のためといった項目は、あまり志望動機にはならない傾向にあった (Table 1 - 2)。また、教育学部に入学しての満足感を同時に測定したところ、高い値であった (Table 1 - 2)。これらの結果から、対象校の教育学部へ入学してくる学生は、学問への興味関心が高く、また入学したことに満足して

Table 1 - 2 各項目が志望動機として当てはまる程度 (5件法)

志望動機	M	SD	N
学問に興味・関心	4.65	0.70	71
学 力 レ ベ ル	3.44	1.25	71
親 や 教 師	2.06	1.41	70
就 職	2.62	1.31	71
入 学 満 足 度	4.35	0.85	71

いる人が多いことが分かった。志望動機と満足感の相関係数を算出してみたところ、学問への興味・関心と満足感の間に有意な中程度の正の相関係数 ( $r = .502$ ,  $p < .001$ ) が得られ、学問への興味があって志望した人ほど、入学への満足感が高いことが分かった。他の志望動機との間には有意な相関は見られなかった。

吉崎・廣岡 (1994) の調査においても、学問分野への興味が志望動機として重要であることが示されており、大学選択の際に学問への関心が大きな要因となっていることがうかがえる。

### 入学前の情報収集

平均値を見ると、受験前に学部で学ぶ学問について情報を収集した程度はあまり高くない。また、教育学や心理学の本を読んだ程度はさらに低い (Table 1 - 3)。

Table 1 - 3 教育学部で学ぶ学問に関する情報収集 (4件法)

項 目	M	SD	N
情 報 を 集 め た	2.55	0.63	71
職 業 と 結 び 付 け た	2.85	0.95	71
教育学の本を読んだ	1.82	0.66	71
心理学の本を読んだ	1.85	0.71	71

先の志望動機に関する結果を考え合わせると、学問への興味関心は高い一方で、具体的な情報収集はそれに追いついていないのかもしれない。実質的な学問の内容以上に、学問への表面的な興味関心が、志望校選択に影響を与えている可能性が推測される。

### 学問イメージの推移

教育学、心理学を分けて、各時点でSD形容詞の主成分分析を行なった。結果はいずれも1因子性が高く、ポジティブ・ネガティブの因子と解釈した。教育学イメー

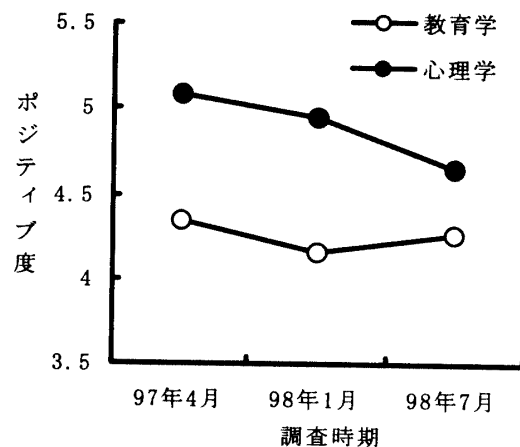


Figure 1 - 1 学問イメージの推移

ジの信頼性係数（ $\alpha$ 係数）は、97年4月は.806、98年1月は.860、98年7月は.905だった。心理学イメージは順に、.799、.787、.775だった。以下では、項目合成得点を用いる。

Figure 1-1をみると、全般として心理学は教育学に比してイメージが良好である。ただし教育学のイメージが、3つの時点を通してほぼ横ばいなのに対し、心理学のイメージは下降傾向にある。その結果、98年7月の調査時には両者のイメージはかなり接近している。心理学イメージがネガティブになった一因には、マスコミなどで取り上げられる心理学と、大学教育における心理学とのギャップの大きさが考えられる。

### 大学生活での重視度

本節では項目ごとの結果を使用する。吉崎・廣岡（1994）と同様、全体的に重視度は低下傾向にあり、入学当初の期待が時とともに薄らいでいくことが分かる（Figure 1-2）。

本調査での対照的な結果は、専門的学問の重視度が低下傾向にあるのに対し、アルバイト・旅行の重視度が向上傾向にあることである。先に志望動機の項で述べたように、学生の学問への関心は高い。しかし、1年次で受講できる専門科目のコマ数は限られており、そのようなカリキュラムが当初の学問への意欲を鈍化させている可能性がある。

また、ボランティアや資格取得などへの重視度も低下している。資格取得は就職と関連した事項であり、まだ就職を実感できる時期ではないことから低下したのであろう。ボランティア活動などは、入学当初行なってみたいと考えていた人達が、大学生活の中で実際に参加する機会を見つけられないまま徐々に重視度が低下したので

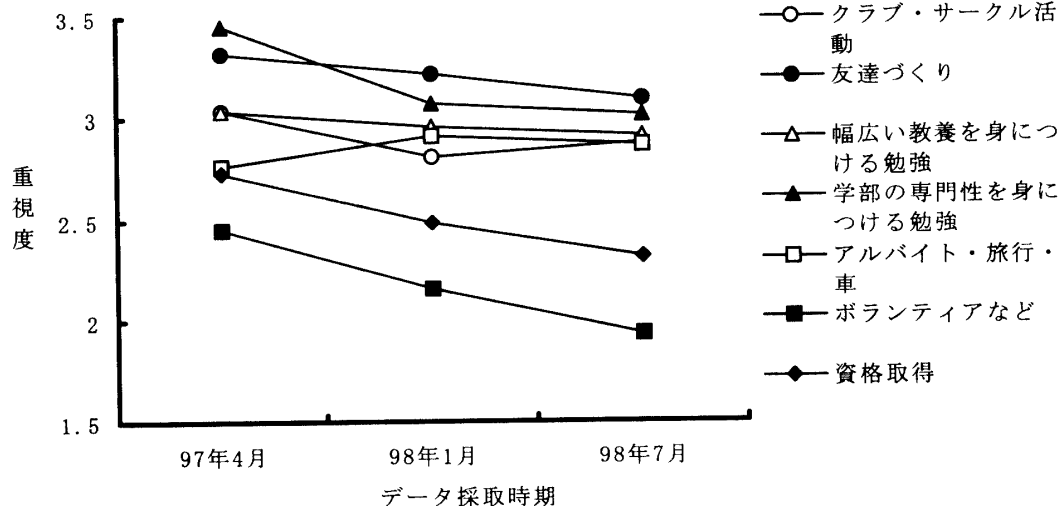


Figure 1-2 大学生活での重視度の推移

はないかと推測される。

### 重視順序

各項目が重視順序1位に選ばれた頻度を結果として使用する。Figure 1-3から、人とのつきあいは一貫して1位被選択率が高く、多くの学生が、大学生活に幅広い人づきあいを求めていることが分かる。学問的専門性の被選択率は低下傾向にあり、前記の重視度の結果と対応している。好条件の職に就くことは最初の4月の時点では誰も選ばなかったが、徐々に増加している。大学生活を送る中で、現実的な感覚が生まれてくるのかもしれない。

### 大学への同一性

97年4月と97年11月に行なった2回分のデータをそれぞれ主成分分析した。尺度構造の解釈しやすさを重視し、

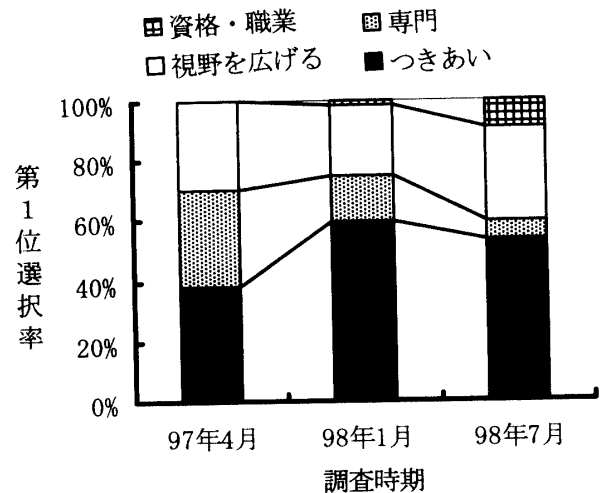


Figure 1-3 大学生活で最も重視することの推移

1 因子構造とみなした。 $\alpha$ 係数を算出してみたところ、それぞれ .690 と .698 であった。

97年4月の平均値は5点尺度上で、3.83（尺度項目の合計得点を項目数で割ってある）、同年11月では3.77でいずれも中間点の3点を越えており、入学した直後から大学への同一性は高めであることが分かる。4月から11月にかけて平均値が少し低下しているが、これは大学に慣れてきたことで、「大学の一員としての自分」を入学直後ほど強く感じなくなってきたことがその一因だろう。

### 対人関係および授業・学習に関する尺度

以下に対人関係、授業・学習に関連する項目の結果を報告する。これらの項目は、98年1月に測定されたものである（Table 1-4）。

**各カテゴリーの友人の重要度とその人数** 教育学部の友人がほぼ4割の比重で他の2つがそれぞれ3割ずつといった結果であるが、ばらつきが非常に大きい。また、人数についてもばらつきが大きい。平均値から見ると学部の友人は他のカテゴリーに比べると少ない。学部の友人は、人数は少なくとも重要な位置づけにあると推測される。

**学部友人親密度** 学部の友人とのつきあいの親密度を測定した7項目に対し、主成分分析を行なった。その結果、1因子性が高かったため1因子の親密度尺度として得点を合成した（ $\alpha = .869$ ）。平均値は3.06と中間点よ

り高く、親密化が進んでいることがうかがえる。

**教官への親近感** 教育学と心理学それぞれの教官への親近感はそれぞれ2.12、2.28と中間点よりも低い。まだ、教官は近づきたい存在なのであろう。

**受講数** 教育学と心理学に関する97年度の受講数は、ばらつきが少なからずあり、個人差が大きいことがうかがえる。

**授業満足感** 教育学と心理学に関する97年度の授業を受けての満足感、それぞれ2.22、2.55で、教育学に関しては中間点を越えなかった。

**学習取り組み** 教育学、心理学に関する学習への取り組みに関する3項目の $\alpha$ 係数は、それぞれ.642、.702と少し低い。しかし、ここでは分析上の便宜を優先して3項目を合成した学習取り組み尺度として用いた。平均得点はそれぞれ、1.84と2.06と低めであるが、学年的に授業での課題も相対的に少くないことから、この程度に落ち着いたのだろう。

**カリキュラムへの満足感** 教育学部のカリキュラムへの満足感、2.30で、中間点よりやや低い値が得られた。

### 学業関連変数・対人関係・大学への同一性の相互関連

98年1月における対人関係、学習への取り組み、授業満足感、カリキュラムへの満足感の相関、そしてこれらの変数と他の変数との相関関係をもとに考察を行なう。

Table 1-4 対人関係、授業・学習に関する項目の平均得点と標準偏差

項 目	M	SD	項目数	N
教育学部友人重要	39.22	16.27	1	67
人 数	8.34	4.94	1	67
他学部友人重要度	29.67	18.50	1	67
人 数	10.16	9.72	1	67
大学外友人重要度	31.10	17.38	1	67
人 数	10.16	13.71	1	67
学部友人親密度	3.06	0.66	7(.869)	67
教育学教官親近感	2.12	0.66	1	67
心理学教官親近感	2.28	0.67	1	67
教育学受講数	2.70	1.40	1	67
心理学受講数	2.13	1.15	1	67
教育学授業満足感	2.22	0.65	1	67
心理学授業満足感	2.55	0.74	1	67
教育学取り組み	1.84	0.50	3(.642)	67
心理学取り組み	2.06	0.59	3(.702)	67
カリキュラム満足	2.30	0.52	1	67

( )の中は $\alpha$ 係数

大学生の適応過程に関する縦断的研究（1）

大学への同一性、学習への取り組み、学部友人親密度、そして教官への親近感の相互連関 Lave & Wenger (1991) によるLPPの考えに従えば、学習と同一性の形成は共変しながら進展する。その際に、共同体内での熟練者が、あるべきひとつのモデルとしての役割を果たすとされている。しかし、そのような学習が成立していく上では、同僚の存在も重要であろう。というのは、同じ集団に属している成員との相互作用は、同一性の形成を促進し、それが学習にも影響を及ぼすと考えられるからである。そこで、本研究では、それらの変数同士の相関係数を算出してみた (Table 1 - 5)。

一見して多くの有意な相関関係があることが分かるが、これを図にすると Figure 1 - 4 のようになる。

Table 1 - 5, Figure 1 - 4 から教育学への取り組み、教育学の授業満足感、そして教育学の教官への親近感の3者は相互に正に相関しており(それぞれ,  $r = .536, p < .001$ ;  $r = .360, p < .01$ ;  $r = .365, p < .01$ ), 密接な関連があることが分かる。これと同じ関連が心理学に関してでもみられる(同じ順で,  $r = .518, p < .001$ ;  $r = .502, p < .001$ ;  $r = .464, p < .001$ )。また、教育学への取り組みと心理学への取り組み、教育学教官への親近感と心理学教官への親近感もまた正に相関しており(それぞれ,  $r = .580, p < .001$ ;  $r = .639, p < .001$ )、学問間で強い関連があることが分かる。

LPPにおける熟練者の役回りとして、本研究では教官を想定していたが、教官への親近感が学習への取り組み

Table 1 - 5 大学への同一性、学習への取り組み、学部の友人との親密度、授業満足感、教官への親近感の相関

	2	3	4	5	6	7	8
1. 97年11月の大学同一性	.125	.173	.267*	.156	.085	.024	.106
2. 教育学への取り組み		.580***	.144	.536***	.118	.365**	.380**
3. 心理学への取り組み			.305*	.083	.518***	.251*	.464***
4. 学部友人親密度				.132	.038	.073	.008
5. 教育学授業満足感					.022	.360**	.166
6. 心理学授業満足感						.202	.502***
7. 教育学教官親近感							.639***
8. 心理学教官親近感							.639***

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

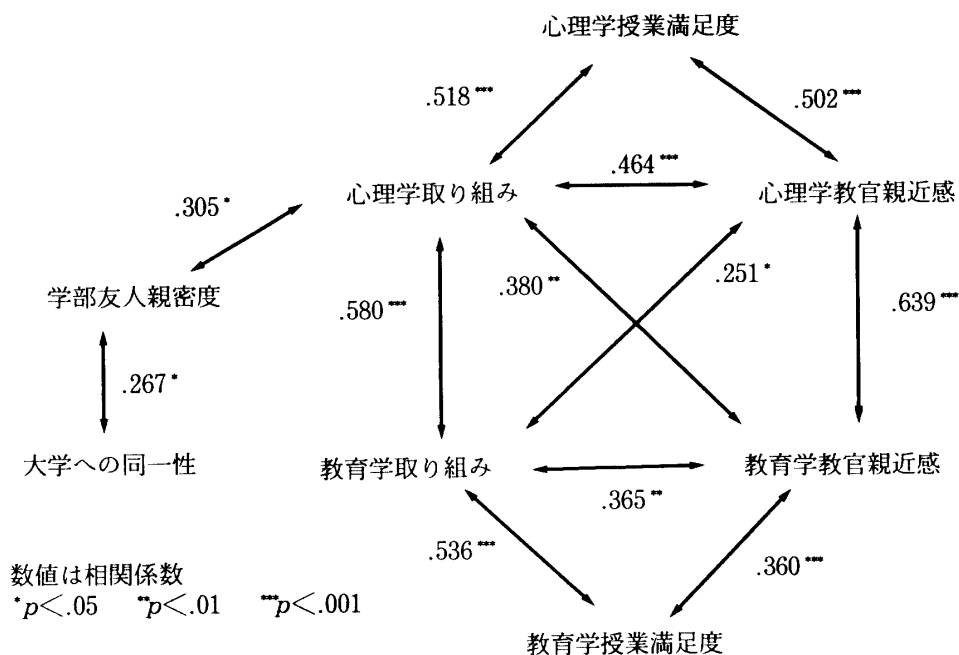


Figure 1 - 4 大学への同一性、学部の友人との親密度、学習への取り組み、授業満足感、教官への親近感の相関



みや授業満足感に関連していることが上記から明らかとなった。

97年11月の大学への同一性は、98年1月での学部友人親密度と正相関する ( $r=.267, p<.05$ ) ほかは、学習への取り組み、授業満足感、教官への親近感とは直接の相関を持たないことが分かる。しかし、学部友人親密度は、心理学への取り組みと正に相関している ( $r=.305, p<.05$ )。すなわち、大学への同一性は、学部の友人との親密度を媒介して、心理学への取り組みに関連している。この結果から、心理学に限っては、大学への同一性、同僚の存在が学習に影響を持っていることが分かった。

上記から、Lave & Wenger (1991) で述べられている学習と熟練者の存在との関連は本研究でも確かめられたが、同一性に関しては効果が直接的ではなかった。この理由のひとつとしては、同一性の尺度が大学に対するもので、同一化対象が大きすぎて、学習に直結しにくいことがあげられる。学部や、専門コースに対する同一性も測定すれば、結果は異なるのかもしれない。

いまひとつの理由としては、調査時にはカリキュラム的にまだ学生への課題も少ない段階で、大学への同一性と学習に関連性が薄いこともあげられよう。専門課程に入ると課題の量も多くなり、同一性と学習がより密接になることが予測できる。

**学習への取り組み、教官への親近感、授業満足感と学問イメージとの関連** 98年1月の学習への取り組み、教官への親近感、授業満足感と、98年7月の学問イメージとの関連を相関係数から検討した (Table 1-6)。

98年7月の学問イメージとの相関係数を見ると、教育学への取り組みとはほとんど相関がないが、心理学では有意な正の相関が示された (それぞれ、 $r=.191, ns$ ;  $r=.328, p<.01$ )。また、授業満足感では、教育学への満足感がポジティブイメージに正に相関していたが、心理学では有意な相関係数を得られなかった (それぞれ、 $r=.368, p<.01$ ;  $r=.129, ns$ )。教官への親近感は教育学、心理学ともにそれぞれの学問イメージに正に相関し

Table 1-6 98年1月の学習への取り組み、授業満足感、教官への親近感と、98年7月の学問イメージの相関

	98年7月の学問イメージ	
	教育学	心理学
教育学への取り組み	.191	.200
心理学への取り組み	-.077	.328**
教育学授業満足感	.368**	.078
心理学授業満足感	.046	.129
教育学教官親近感	.292*	.019
心理学教官親近感	.182	.290*

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$

ていた (それぞれ、 $r=.292, p<.05$ ;  $r=.290, p<.05$ )。これらの結果から、98年1月の段階での学問への取り組み、授業満足感、教官への親近感が後の学問イメージに関連があることが明らかになった。ただし、心理学と教育学で結果が異なっている部分があるが、本節では考察は留保しておく。

**入学時の志望動機、満足感と学習への取り組み、授業満足感、教官への親近感の関連** 学部への志望動機と満足感が、ほぼ1年後の98年1月の段階での学習への取り組み、授業満足感、教官への親近感と関連があるかを検討するため相関係数を算出した (Table 1-7)。

学問への興味・関心が志望動機として大きかった人は、教育学、心理学への取り組み、それぞれの教官との親近感で有意な正の相関を示した (それぞれ、 $r=.365, p<.01$ ;  $r=.350, p<.01$ ;  $r=.317, p<.01$ ;  $r=.344, p<.01$ )。学力レベルがあっていたことが志望動機として大きかった人は、心理学の教官に親近感が低くなることが分かった ( $r=-.391, p<.01$ )。親や教師にすすめられたことが動機として大きかったほど、心理学への取り組みが高く ( $r=.243, p<.05$ )、教育学の授業を受けての満足感が高かった ( $r=.385, p<.01$ )。志望動機としての就職および入学しての満足感と有意に関連するもの

Table 1-7 志望動機、入学満足感と、学習への取り組み、授業満足感、教官への親近感の相関

	入 学 時 志 望 動 機				入学満足度
	学問への関心	学力レベル	親・教師のすすめ	就 職	
教育学取り組み	.365**	.067	.230	-.015	.180
心理学取り組み	.350**	-.087	.243*	.015	.130
教育学授業満足感	.144	.069	.385**	.009	.162
心理学授業満足感	.179	-.168	.073	.032	.031
教育学教官親近感	.317**	-.114	.083	-.010	.223
心理学教官親近感	.344**	-.391**	.000	.039	.093

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$

はなかった。

いくつかの入学時の志望動機は、少なくとも1年目に限っては、学習への取り組みや、教官への親近感に関連を持つことが分かった。学問への関心が高かった人は、その関心にしたがって、学習に取り組み、それを通してその道の先達である教官に対しても親近感を覚えていくのであろう。学力レベルを重視した人は入学後の目標が不明確である可能性が高く、教官に対して親近感が沸いてこないのかもしれない。親や教師にすすめられたことが志望動機にあてはまる人は、周囲からの影響に敏感であることが推測できる。したがって、大学からカリキュラムを与えられると、比較的着実にそれにしたがっていき、その結果学問への取り組みが高くなり、教育学の授業満足感が高くなるのであろう。

学業関連変数、対人関係変数、大学への同一性の相互関連についてのここまでの結果を大まかにまとめておく。学習への取り組みには、入学時の志望動機としての学問への興味・関心、教官への親近感、授業への満足感、そして心理学に関してはこれらに加えて、学部の友人との親密度が関連していることが分かった。この学部の友人との親密度と大学への同一性とは正に相関している。また、教官への親近感および、教育学では授業満足感、心理学では学習への取り組みが、その後の学問イメージにポジティブな関連を持つことが分かった。

Lave & Wenger (1991) で述べられているような同一性と学習の共変は、本研究では直接的には見出されなかった。同一性は、学部の友人との親密度を媒介として心理学への取り組みに関連しており、間接的な学習への取り組みへの効果が示された。本研究では、同一性は大学に対するものとして測定されており、その概念的広さが相関を希薄にしたと考えられる。また、時期的に、大学からの学問的要請が比較的少ないことも、相関を低めた一因にあげられる。

一方、学問の熟練者としての教官に対する親近感は、学業への取り組みや、その後の学問イメージに正相関しており、熟練者との関係が学業への取り組みにとって重要であることが示唆された。

## まとめと今後の方針

本節では、大学新入生の志望動機や受験前の情報収集の程度などの実態調査的報告と、学問イメージの推移を検討した。さらに、学習への取り組み、大学への同一性、そして対人関係がどのように相互関連するのかを検討した。

結果として、本調査の対象校の新入生は、学問的関心が大きな志望動機となって入学してきていることが分かっ

た。

学問イメージでは、心理学のイメージが教育学のイメージに比べると相対的に良好でありながらも、時間とともにイメージが良くない方に推移していることが明らかとなった。また、大学生活では、学問の専門性よりも、友達づきあいや、バイトや旅行を重視する方向にあることも分かった。学問イメージ、大学生活での重視点については、今後も調査を継続していくことで、1年次から4年次までの大学生時代を通した推移を明らかに出来るであろう。

学習への取り組み、同一性の形成、対人関係の相互関連に関しては結果と考察の項で結果をまとめてあるので繰り返さないが、今後の調査ではより概念に適合した尺度を加えて検討する必要があるであろう。特に被験者群はこれからより専門的な課程に進んでいくので、そこでの同一性の変化、学習への意欲の変化等を正確に反映できる尺度の作成が必要だと考えられる。それらを用いて、教官や友人の存在、同一性の形成、そして専門的カリキュラムが、学習行動にどう関連するのかを検討していく。

## 研究Ⅱ ライフイベントと社会的スキルについて<sup>7)</sup>

### 問題と目的

わが国において、大学の4年間は高等教育の場としてのみならず、社会人に要求される一般常識習得のための準備期間としても位置づけられているのが現状である。大学入学と共に学生の行動範囲は質量ともに格段に広がり、学業のみならずサークル、アルバイト、そして独り暮らしなどの多くの経験を通じて、さまざまな知識や価値観が習得されるとするならば、大学生活の中でどのようなイベントが経験され、それらがどのような推移をするのかを理解することは、大学生の社会適応という観点からは重要であると考えられる。

その一方で、大学生の日常生活における諸問題も近年顕在化しつつある。「対人関係になじめない」「大学で居場所が見つけられない」などの理由で増加している不登校、深い人間関係の回避によるサークルの消滅傾向などは、文部省に「大学による学生生活の支援策」検討のために大学教員らを集めた研究会を発足させるまでになっている。このように、大学生の日常生活における対人関係やサークル活動の在り方は、今や在学生の大学適応という側面からも重要な問題であると考えられよう。

7) 執筆者：橋本 剛

すなわち、大学生の日常生活におけるさまざまな経験は、在学時／卒業後両方の適応という観点から重要な問題であると考えられる。しかし、この問題を実証的に扱った研究は多くない。幸いにも、本共同研究は大学生の学業達成、クリティカルシンキング、職業志向性、人間観や精神的健康など、学業・社会・健康という多面的な側面での適応指標を測定している。そしてそれらを従属変数、ライフイベントを独立変数として想定すれば、大学4年間におけるさまざまな人生経験が、果たして適応や人格的成長を促すのかという問題を検討することは可能であろう。すなわち、本研究におけるライフイベントの導入は、(1)大学時代のイベント経験が個人の成長や適応を促すのか、(2)もしそうならば、果たしてどのような経験が、どのような側面での適応／成長を促すのか、という問題を検討可能とする。加えて、生活におけるさまざまな経験は適応を促すのみならず、それを阻害することもあり得よう。そしてこの点に関しても、ライフイベントの測定によって、(3)適応阻害イベントを同定し、(4)それらの生起状況を知ることによって教育的配慮を検討することにつながる。

今回の縦断研究では以上の理由から、ライフイベントの生起状況も観測変数として採用した。ただし、本研究は未だ進行中であり、現時点でイベントと適応の因果を議論するのは性急である。よって本報告では、大学1～2年次に経験されるイベントの経時的推移を現象記述的に示すことを第一の目的とする。

また、それらのイベント経験は個人の適応／成長に対する独立変数としてのみならず、個人の資質や社会的文脈によって生起が喚起される従属変数とも考えられる。例えば、社交的な人はシャイな人よりも、対人関係にまつわるさまざまなイベントを多く経験するであろうし、自宅生は下宿生よりも家族にまつわるイベントを経験する可能性が高いであろう。このような観点から、ライフイベント生起に影響を及ぼす重要な変数のひとつとして、社会的スキルが考えられる。社会的スキルはライフイベントに対して、以下の二つの意味で重要な変数である；(1)多くのライフイベントは社会的文脈の中で生起する。よって、それらの生起には社会的文脈への関与が不可欠であり、そのためには円滑な社会的生活を営むための技術である社会的スキルの存在が不可欠である；(2)ライフイベントの中には、何らかの対処が要求されるものも少なくない。そしてその対処において、社会的スキルの有無は重要な問題であると考えられる。すなわち、社会的スキルの欠如はライフイベントの悪影響を緩和できないが故に、不適応を導く可能性がある。さらに、大学4年間での社会的スキルの習得の有無は、それ自体がひとつ

の社会適応指標とも考えられる。そこで本研究では、ライフイベントの規定因及びストレス緩衝要因として、そして社会的適応指標として、社会的スキルも測定する。ただし、本研究は先述したように未だ進行中であり、本報告の段階でその緩衝効果を検討するのは困難であるので、後者の論点については本稿では割愛する。よってここでは、社会的スキルとイベント生起の関連を検討することを第二の目的とする。

## 方 法

本研究のデータは本論文の冒頭に記した計画に基づいた縦断研究の一部であり、被調査者はその参加者71名（男子25名、女子46名）である。本研究で扱う変数は以下の2つである。

- ①社会的スキル：Takai & Ota (1994) の「日本的コミュニケーション・スキル尺度 (JICS)」から選択した項目に、独自に作成した主張スキルや討論スキルを加えた全30項目。1997年4月（大学入学直後）に実施した。
- ②ライフイベント：久田・丹羽 (1987) の「大学生用生活体験尺度 (CLES)」から選択した全50項目（第3回以降は52項目）。1997年5月（1年前期）、1997年11月（1年後期）、1998年4月（2年前期）、1998年11月（2年後期）の4回それぞれ、過去半年間について経験の有無およびその重要度を尋ねた。ただし今回の分析では経験の有無のみに焦点を絞る。

## 結 果

### 社会的スキル尺度の構造

まず社会的スキルについて因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った結果、固有値の減衰状況から3因子解と判断した（Table 2-1）。第1因子はJICSの自己抑制能力・社会的適正に該当する項目が主であり、「社会的適正」因子とした。第2因子は同じく察し能力・対人感受性に関する項目が該当し、「対人感受性」因子と考えられた。第3因子は今回新たに作成した主張・討論スキル項目が主に高い負荷を示し、「主張性」因子と命名された。これらの概念は表面的に弁別性も明瞭であり、因子負荷.40を基準にそれぞれ下位尺度（9～5項目）を構成した。なお、尺度得点に性差は見られなかった。

### ライフイベント

ライフイベントについては、まず各回における経験イベント数の平均値を算出した。また、久田・丹羽 (1987) のデータに基づいてポジティブイベント（8項目）とネガティブイベント（18項目）を同定した（Table 2-

Table 2 - 1 社会的スキル尺度因子分析結果

	因 子		
	I	II	III
〈社会的適正〉			
2 つまらない話をながながと続ける相手に対して、興味深く聞いてあげることができる	.590	.216	.055
3 先生や先輩には常に敬語で接するように心がけている	.566	-.164	.018
8 自分に責任がなく、単なる誤解によって先生や先輩に叱られたとしても、反省している態度をみせることができる	.589	.342	.072
11 嫌いな先生や先輩であっても、敬意を表し、その人を立てることができる	.663	.126	.108
14 強い反対意見を持っていても、それを表現せずに抑えて、周囲の人に協調することができる	.427	.281	-.157
18 どのような相手に、どのような場面で敬語を使わなければならないのかがはっきりわかる	.552	-.047	.347
19 嫌いな相手とつきあうとき、相手に対する自分の本心が伝わらないようにすることができる	.495	.328	.066
22 自分の興味がない話題であっても、先生や先輩に話題を合わせることができる。	.538	.129	.031
25 先生や先輩に嫌な仕事を頼まれても、嫌気をみせずそれを引き受けることができる	.615	-.042	-.093
〈対人感受性〉			
1 相手から明確な返事をもらえなくても、大体どのような返事が意図されているかわかる	.098	.647	.316
4 好きな異性に自分の気持ちをさりげなくわかってもらえるようにすることに自信がある	-.044	.523	.077
10 相手が自分に対して何か不満があるとき、言われなくてもそれを察することができる	.361	.477	.100
15 相手が自分に対してどのように思っているのかを推測することが苦手である	-.301	-.604	-.039
20 誠心誠意の招待と社交辞令的な招待を簡単に見分けることができる	-.068	.507	.412
26 相手に話しにくいことでも、婉曲に示唆して伝えることができる	.057	.553	.053
28 言葉で言われなくても、異性の相手が自分に好意があることを察知することに自信がある	.208	.541	.050
〈主張性〉			
6 討論や討議の場面では、周囲の場を乱さずに、自分の意見を主張することができる	-.030	.099	.685
17 自分の意見や考えを、的確な例やたとえを用いて、わかりやすく説明することが苦手である	-.038	.117	-.499
21 忙しいときに長い話になりそうな電話がかかってきたら、そのことを伝えて自分から電話を切り上げることができる	-.350	.190	.420
24 自分の意見や主張が求められれば、同じことを繰り返さずに、明確に伝える自信がある	-.180	.289	.569
27 重要なことを目上の人に話す場合、適切な場所と時を難なくわきまえることができる	.279	.123	.626
〈残余項目〉			
5 強引なセールスやしつこい宗教への勧誘を、はっきり断ることができる	-.181	.207	.320
7 何か婉曲に示唆されていることにすぐ気がつく	.144	.395	.369
9 周りがうるさいとき、怒りを表さずに静かにするように要請することができる	.338	.179	.308
12 自分から知人を映画や買い物に誘うことが苦手である	.130	-.224	-.112
13 親しい人から嫌なことを頼まれたとき、穏やかに断ることができる	-.378	.169	.089
16 行列に割り込まれても、順番に並ぶように主張することができる	-.180	.038	.153
23 相手が何か言いにくそうなことがあることをすぐに察知できる	.286	.297	.319
29 嫌いな相手にほめられても、謙虚な態度をみせることができる	.349	.233	.046
30 友だちが自分の気持ちを傷つけるようなことをしたとき、相手を非難せずに自分の不満を主張できる	.149	.188	.371
2 乗 和	3.96	3.20	2.55
寄 与 率 (%)	13.19	10.67	8.50

Table 2-2 ライフイベント項目 (Pはポジティブ項目, Nはネガティブ項目として採用)

P 1	新しく習い事や趣味を始めた
N 2	通学時間が変わった (増えた, または減った)
3	災害や事故にあった (大雨, 大雪, 火事, 交通事故など)
P 4	娯楽施設 (映画, 演劇, コンサート, 遊園地, スポーツ施設など) に行く機会が増えた, または減った
5	お酒をのむ機会が増えた, または減った
P 6	新しくアルバイトを始めた
7	アルバイト先でトラブルを起こした
8	就職活動をした
9	生活パターンが大きく変わった (食生活, 睡眠時間, 帰宅時間など)
10	一人で過ごす時間が増えた, または減った
11	生活上の仕事 (洗濯, 掃除, 炊事など) が増えた
12	自分の経済状態が変化した (収入や支出の変化)
13	家族, または親しい親戚の誰かが結婚した
N 14	家族, または親しい親戚の誰かが病気やけがをした
N 15	家族と過ごす時間が増えた, または減った
16	父親と母親の仲が変化した (不和, 和解など)
N 17	家族の誰かと論議, 不和, 対立などがあった
N 18	家族の経済状態が変化した
19	父親, または母親の仕事上の変化があった (就職, 転勤, 失業, 退職, 昇進など)
P 20	一緒に楽しめる友人が増えた
N 21	信頼していた友人, 先輩などにうらぎられた
N 22	友人や仲間から批判されたり, からかわれたりした
N 23	興味のない授業を受けるようになった
P 24	学業上の努力が先生や仲間に認められた (試験, レポート, 発表など)
N 25	学業上の成果 (試験, レポート, 発表など) が先生や仲間にけなされた
26	教師と何らかのトラブルがあった
P 27	クラブ, サークル, ゼミなどで人とのつき合いが増えた
28	クラブ, サークル, ゼミなどで責任ある地位についた
29	クラブやサークル活動で束縛される時間が増えた
N 30	学業上のことで失敗した (成績の低下, 単位を落とす, 留年するなど)
N 31	課題 (試験やレポートなど) が大変な授業を受けるようになった
32	親しい友人が病気やけがをしたり死んだりした
N 33	仲間の話題についていけなかった
34	友人の悩みやトラブルに関わりをもった
N 35	自分に関するうわさが広まった
N 36	他人から誤解された
N 37	隣近所が騒がしくなった
38	どろぼうに入られた
39	痴漢にあった, あるいはおそわれそうになった
N 40	隣近所に気をつかうようになった
P 41	異性に接する機会が増えた, または減った
P 42	特定の異性との交際が始まった
43	恋人との関係 (つきあい方, 相手への気持ち) が変化した
44	恋人と別れた

- 45 恋人が病気やけがをした
- 46 体重が変化した（増えた、あるいは減った）
- N 47 からだの調子変化した（病気やけがも含む）
- N 48 生活習慣（言葉、服装、マナーなど）の違いにとまどった
- 49 法律に触れるような行為をしてつかまった（交通違反やキセルも含む）
- 50 いやな人から交際を迫られた
- 51 国内旅行をした
- 52 海外旅行をした

2)。同定に際しては、評価が拮抗している項目、評価は明確でも経験率の低い項目、男女で評価に差がある項目を除外するため、男女別に「経験し、かつポジティブと評価した人の%」と「経験し、かつネガティブと評価した人の%」の差を求め、男女いずれも前者が後者より10%以上高い項目をポジティブ項目、男女いずれも後者が前者より10%以上高い項目をネガティブ項目とし、それぞれの合計を項目数で割ったものを各回のポジティブ／ネガティブイベント得点とした。

これらの基本統計量を求めた結果（Table 2-3）、ライフイベント経験数は、1年目（第1回・第2回）が2年目（第3回・第4回）より、平均値が高く標準偏差

Table 2-3 社会的スキル・イベント経験数・ポジティブ／ネガティブイベント経験率平均

	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
社会的スキル			
社会的適正	70	28.44	6.41
対人感受性	70	20.51	4.57
主張性	70	14.60	3.33
イベント経験数			
第1回	70	18.46	5.13
第2回	68	19.03	5.46
第3回	68	14.57	6.58
第4回	63	15.70	6.65
ポジティブイベント経験率			
第1回	70	.62	.19
第2回	69	.66	.22
第3回	69	.43	.26
第4回	69	.45	.23
ネガティブイベント経験率			
第1回	71	.36	.14
第2回	71	.35	.16
第3回	70	.24	.17
第4回	66	.25	.17

は小さいことが見いだされた。よって、1年次は大学進学に伴い皆が多くのイベントを経験するが、2年次になると個人差が生じてくると考えられる。この傾向はポジティブ／ネガティブイベントでも見いだされ、それに加えてポジティブイベントは常にネガティブイベントよりも経験率が高かった。さらに、ポジティブ／ネガティブイベントはそれぞれで経時的にも有意な相関を示し、同一時点ではポジティブイベントとネガティブイベントの間にも常に有意な正の相関が見いだされた（Table 2-4）。この結果はすなわち、ポジティブイベントとネガティブイベントは共変することを示唆している。これは直感に反する知見かも知れないが、これと同じ現象はSuh, Diener, & Fujita (1996)でも見いだされており、先行知見と合致するものである。

次に、個々のイベント経験率の経時変化を生活領域ごとに検討した。その結果、まず生活変化イベント（Figure 2-1）は全般的に、入学当初に多くの人を経験し、時間の経過と共にその経験率は低下する傾向にあった。ただし少なからずのイベントについて、2年後期の時点でも経験率が50%を上回っており、これらの生活変化は入学以降ある程度の時間が経過しても、常に少なからずの学生が経験していると考えられる。

大学進学によるこれらの生活変化に伴い、個人の対人関係も同時に変化しているであろう。しかし、友人関係（Figure 2-2）ならびに異性関係（Figure 2-3）のイベントは、全般的に、時間経過によって経験率が変動するというわけではなく、イベントの内容によって、時期に関わらず生起率はわりと安定しているようであった。例えば「友人の悩みやトラブルに関わりを持った」、「批判されたり、からかわれたりした」などのイベントは、親密化によってその生起も増加しそうであるが、これらの経験率は経時的にかなり安定している。また、同じく対人領域のひとつである家族イベント（Figure 2-4）は、「家族と過ごす時間の増減」以外のほとんどが安定して低い経験率であった。

学業イベント（Figure 2-5）に関しては全般的傾向は見いだせない。そこで個別に検討すると、まず「興

Table 2-4 ポジティブ/ネガティブイベントの経時的相関 (N=64~71)

	ポ ジ テ ィ ブ				ネ ガ テ ィ ブ			
	第1回	第2回	第3回	第4回	第1回	第2回	第3回	第4回
ポジティブ								
第1回	1.000							
第2回	.371***	1.000						
第3回	.255*	.434***	1.000					
第4回	.276*	.375**	.546***	1.000				
ネガティブ								
第1回	.454***	.183	.171	.063	1.000			
第2回	.142	.364**	.120	.167	.422***	1.000		
第3回	.177	.136	.323**	.270*	.502***	.546***	1.000	
第4回	.210†	.055	.134	.477***	.313*	.303*	.418**	1.000

\*\*\*p<.001 \*\*p<.01 \*p<.05 †p<.10

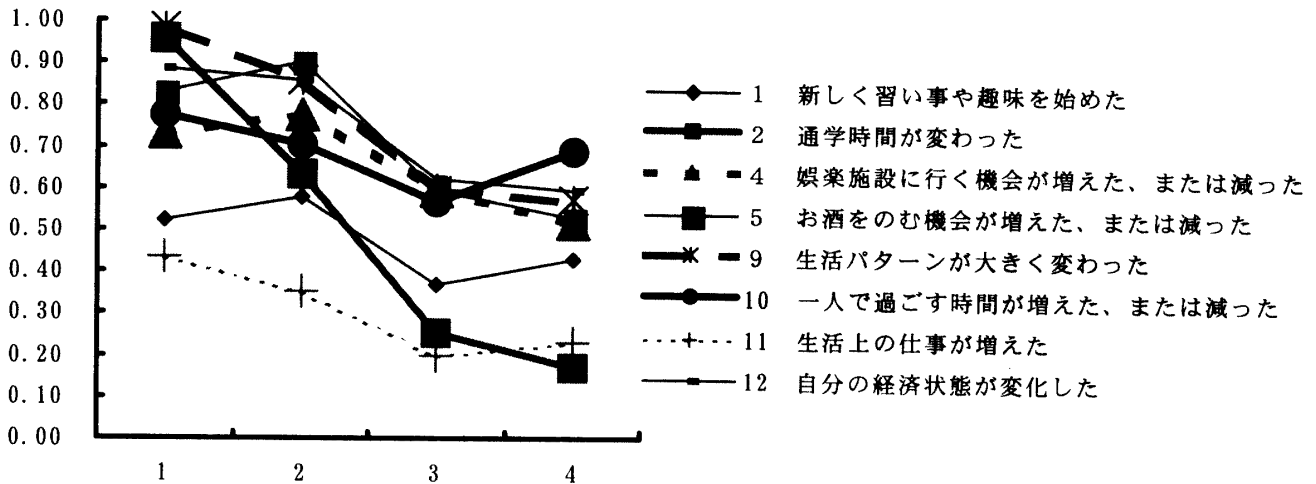


Figure 2-1 生活変化イベント経験率

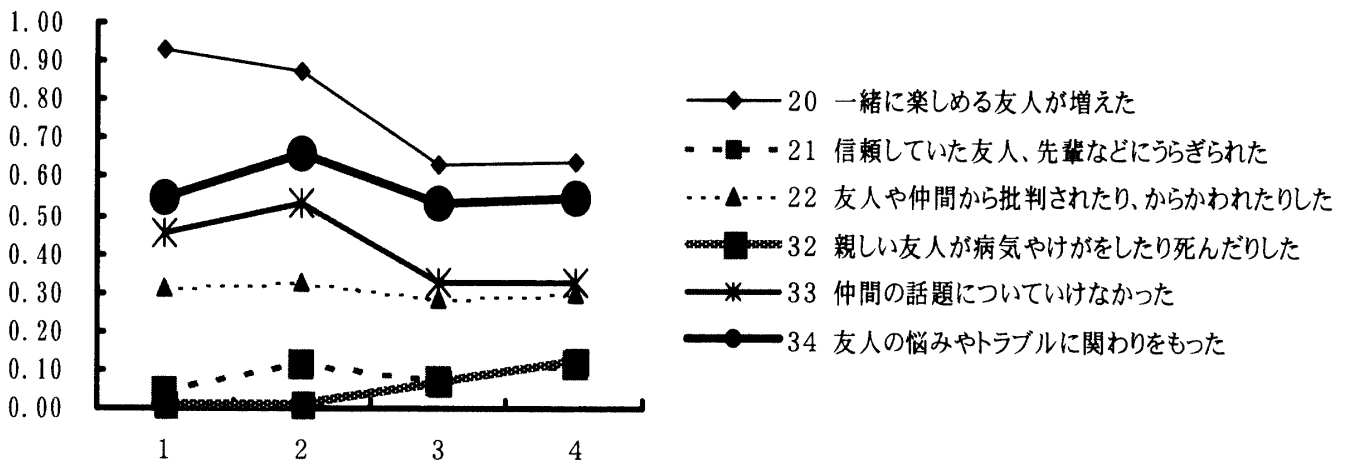


Figure 2-2 友人イベント経験率

味のもてない授業を受けるようになった」というイベントが1年次ではほぼ90%に達しているのが目立つ。これが2年次にある程度は低下していることから、学生は専門

教育への期待はあるが、非専門の概論的な授業に対して不満を持っているのかも知れない。もちろん、学生の興味はカリキュラムを構成する上で考慮すべき事項のひとつ

大学生の適応過程に関する縦断的研究（1）

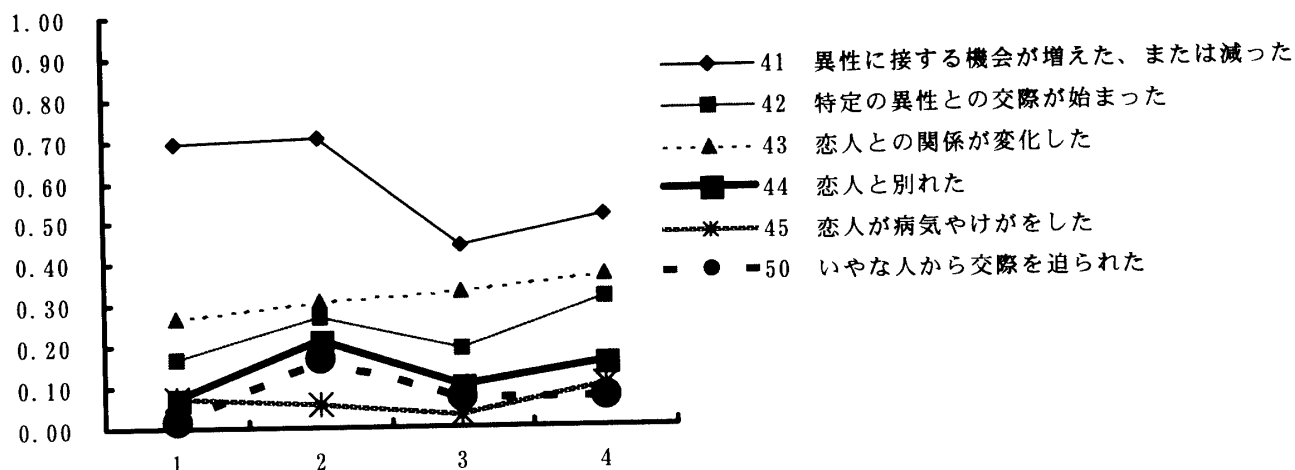


Figure 2-3 異性関係イベント経験率

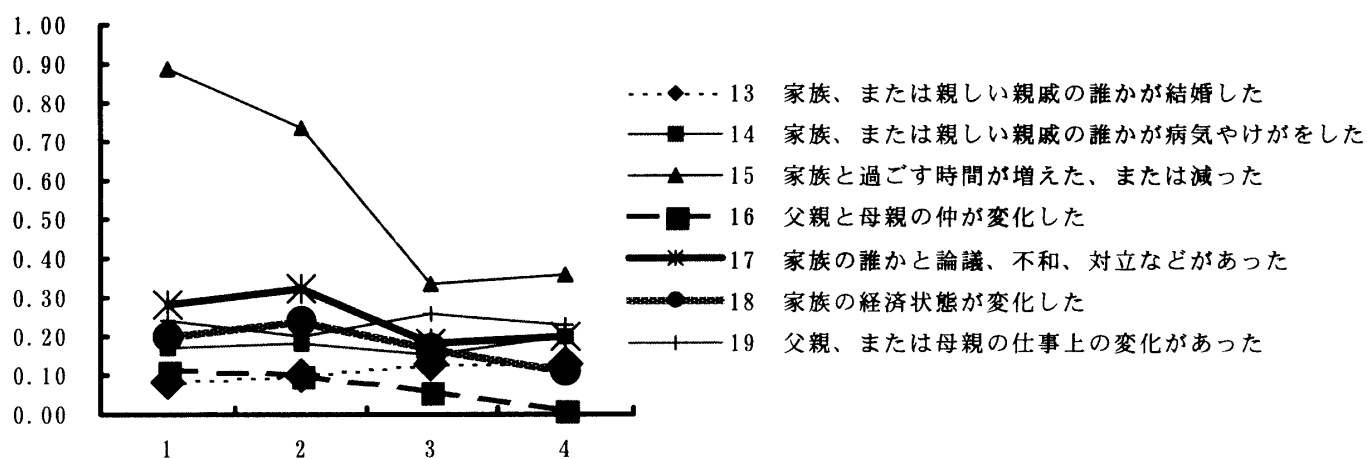


Figure 2-4 家族イベント経験率

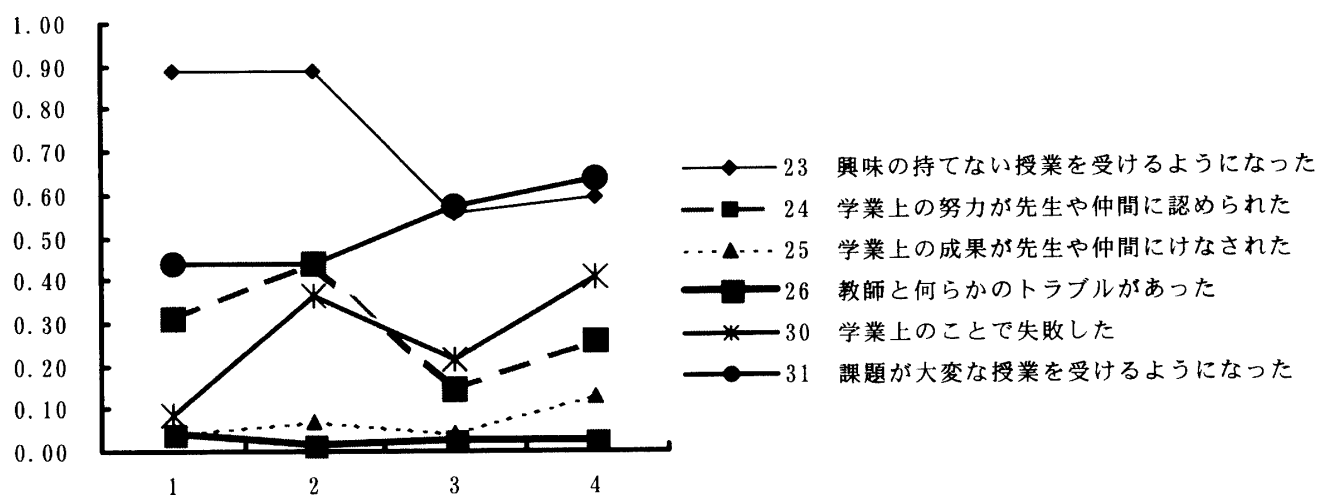


Figure 2-5 学業イベント経験率

つに過ぎないが、この結果は1年次のカリキュラムが学生の期待に十分応えていない可能性を示唆している。しかしその一方で、「課題が大変な授業」「学業上の失敗」は時間経過と共に上昇しており、専門教育の進行が学生

の学業負担を増加させるという解釈も考えられる。概して教養科目は簡単だが興味が湧かず、専門科目は興味深いが大変だということなのかも知れない。時間経過とともに専門教育への興味が低減している（本論文の研究I



参照) こととも併せて、専門教育の在り方は今後も一層の議論が求められよう。

加えて、t検定でライフイベントの性差を検討したところ、経験イベント数やポジティブ/ネガティブイベント経験率については、全4回でいずれも性差は見いだされなかった。また、個々のイベントについて $\chi^2$ 検定(イベント経験の有無×性別)も行ったが、一貫した傾向は確認されなかった。

### 社会的スキルとライフイベントの関連

社会的スキルとイベントの相関を求めたところ(Table 2-5)、感受性スキルとイベントの間に、大きくはないが一貫して正の相関が確認された。したがって、感受性の高い人はさまざまなイベントを経験しやすいと考えられる。しかし社会的スキルとポジティブ/ネガティブイベントでは、対人感受性と第2回・第3回のネガティブイベントに相関が見いだされたのみで、ポジティブイベントとスキルの間には有意な相関は見いだされなかった(Table 2-6)。したがって、「スキルの保持が肯定的なイベントの生起を促し、否定的なイベントの生起を抑制する」という仮説は、この分析では支持されなかった。

さらに、社会的スキルの下位尺度でそれぞれ人数がなるべく均等になるように3群に分け、各下位尺度における高群と低群の間にイベント生起率の差があるかを、 $\chi^2$ 検定で個々のイベント毎に検討した。その結果、対人感受性の高低によって、複数回で生起率に有意差( $p<.05$ )があるイベントがいくつか見いだされた(Table 2-7)。具体的には、「友人の悩みやトラブルへの関わり」(第1回と第2回)、「娯楽施設に行く機会の増減」(第1回と第3回)、「恋人との関係の変化」(第2回, 第3回, 第4回)などのイベントで、対人感受性高群の方が低群よりもイベント経験率が高かった。これらの結果も、対人感受性の高さがある種のイベント経験を誘発しやすいことを示唆している。しかしその一方で「クラブ、サークル、ゼミなどでの人づきあいの増加」は第2回, 第3回, 第4回を通じて、対人感受性低群の方が高群よりも経験率が高かった。なぜこのイベントが、対人感受性低群で生起しやすいのかは明らかでないが、この結果は対人感受性がすべてのイベント経験に正の寄与を持つわけではないことを示している。なお、社会的適正と主張性を用いた同様の分析では、このように複数回で有意差が示されたイベントはほとんどなかった。したがって現時点の分析結果からは、「社会的スキルの中

Table 2-5 社会的スキルとイベントの相関係数 (N=60~70)

	社会的スキル			ライフイベント		
	主張	感受	適正	第1回	第2回	第3回
社会的スキル						
主張性	(.68)					
対人感受性	.245*	(.77)				
社会的適正	.002	.358***	(.81)			
ライフイベント						
第1回	-.022***	.204†	.102			
第2回	.027	.245*	.082	.435***		
第3回	-.133	.308*	.189	.443***	.522***	
第4回	-.009	.291*	.236†	.306*	.314*	.442***

\*\*\* $p<.001$  \*\* $p<.01$  \* $p<.05$  † $p<.10$  括弧内は $\alpha$

Table 2-6 ポジティブ/ネガティブイベントの社会的スキルの相関 (N=65~70)

	ポジティブ				ネガティブ			
	第1回	第2回	第3回	第4回	第1回	第2回	第3回	第4回
社会的適正	.027	-.120	.105	.167	.057	.187	.124	.158
対人感受性	.192	-.060	.169	.069	.112	.238*	.308*	.221
主張性	-.009	.127	.031	-.051	-.080	-.009	-.211†	-.081

\* $p<.05$  † $p<.10$

大学生の適応過程に関する縦断的研究(1)

Table 2-7 対人感受性の高低によるイベント経験率 ( $\chi^2$ 検定, 両側正確有意確率 $p < .05$ の項目のみ)

	経験率		$\chi^2$
	低群	高群	
1回目			
4 娯楽施設に行く機会が増えた, または減った	.63	.95	5.26* a
34 友人の悩みやトラブルに関わりをもった	.41	.76	4.68* a
2回目			
27 クラブ, サークル, ゼミなどで人とのつき合いが増えた	.85	.52	4.33* a
31 課題が大変な授業を受けるようになった	.26	.67	7.97**
34 友人の悩みやトラブルに関わりをもった	.41	.90	10.44*** a
35 自分に関するうわさが広まった	.15	.43	3.39* a
43 恋人との関係が変化した	.22	.52	4.69*
45 恋人が病気やけがをした	.00	.19	3.39* a
3回目			
4 娯楽施設に行く機会が増えた, または減った	.41	.76	4.68* a
12 自分の経済状態が変化した(収入や支出の変化)	.44	.90	9.02*** a
27 クラブ, サークル, ゼミなどで人とのつき合いが増えた	.73	.43	4.41*
36 他人から誤解された	.12	.52	7.42*** a
43 恋人との関係が変化した	.23	.57	5.71*
4回目			
7 アルバイト先でトラブルを起こした	.08	.43	6.17*** a
14 家族, または親しい親戚の誰かが病気やけがをした	.12	.38	3.21* a
27 クラブ, サークル, ゼミなどで人とのつき合いが増えた	.81	.48	4.31* a
29 クラブやサークル活動で束縛される時間が増えた	.69	.35	5.34*
43 恋人との関係が変化した	.19	.62	7.24*** a
44 恋人と別れた	.04	.29	3.82* a

Note: 低群 $N=26-27$ , 高群 $N=20-21$ ,  $df=1$

\*:  $p < .001$  \*\* :  $p < .01$  \* :  $p < .05$  aはイエーツの修正を用いた値

本来 $\chi^2$ 検定においてはクロス表を添付すべきであるが, ここでは表記の簡略化のために各群の経験率を表示した。

でも対人感受性のみがイベントの生起とある程度の関連を持ち, その多くは正の関連を持つが, なかには対人感受性と負の関連を持つイベントもあり得る」と言えよう。

## 考 察

以上の結果から, 本研究では以下の知見が見いだされた。(1)1年次は大学進学に伴い皆が多くイベントを経験するが, 2年次になると個人差が生じてくると考えられる。(2)領域や項目によってイベントの生起状況は多様であり, そこには状況要因, 個人特性, カリキュラムなど多様な要因が介在している。(3)さらに社会的スキルもイベント生起と関連している。ただし下位尺度としては対人感受性のみがイベントの生起とある程度の関連を持ち, その多くは正の関連を持つが, なかには対人感受性と負の関連を持つイベントもあり得る。

これらの知見を踏まえて大学1~2年次の大学適応を考

えるならば, まずは1年次で多くの学生に生活変化が生じていること, そしてそれらの生活変化は過半数の学生で2年次以降も経験されることを認識することは重要であろう。それが肯定的であれ否定的であれ, 生活変化はストレッサーとして考えられ得る (e.g., Holmes & Rahe, 1967) からである。また, 対人関係に関しては個人特性によるところが大きいようであり, 安易な介入は疑問視すべきところも少なくないが, 少なくとも学業イベントの結果から, カリキュラムや個々の授業について改善すべき余地はあるのかも知れない。

また, 社会的スキルはイベント生起の抑制因としてより, 促進因としての側面が強く現れた。目的でも述べたように, ライフイベントの生起には社会的文脈への関与が不可欠であり, そのためには円滑な社会的生活を営むための技術である社会的スキルの存在が不可欠であるという観点からは, この結果はそれなりに妥当なものであ

る。しかし、関連の見られたイベントには否定的な内容のものも少なくなく、社会的スキルが円滑な対人関係のための技術だとすれば、その意味でこの結果は矛盾を含むものでもある。橋本(1997b)は、ある種の対人ストレスラーが、社会的スキルを保持することによってかえって誘発されるという可能性を示唆している。その観点も含め、イベントと社会的スキルの関連については、さらなる検討が求められる。

今後は、問題で触れたが今回は扱わなかった問題、すなわちイベントとさまざまな適応指標の関連、イベント生起によるストレスに対する社会的スキルの緩衝効果、社会適応指標としての社会的スキルの縦断的变化などを検討する予定である。

### 研究Ⅲ 職業観について<sup>8)</sup>

#### 目 的

本研究では、大学生の適応過程に関する一連の縦断研究において、これまでに収集された、大学生の職業観に関するデータの一部について報告する。

大学生にとって、卒業後の進路を決定することは、どのような道に進むにせよ、大学生活における最も重要な課題の1つであるといえよう。そうした進路決定にあたって、4年間の大学生活はいかなる影響を及ぼしているのだろうか。本研究は、大学生の職業観の変化を大学初年度から縦断的に追跡することによって、進路決定における大学生活が果たす役割について検討しようとするものである。調査は1997年から実施されている。

今回報告するのは、これまで2年間に渡ってなされてきた調査のうち、初回の調査時(大学初年度)に得たデータに関するものである。

#### 方 法

被調査者は、他の研究と同一であり、全て教育学部の学生71名(男性25名、女性46名)である。ここで、本研究の被調査者が所属する教育学部について、その学生の卒業後の進路に関する特徴を概略しておく。被調査者が所属する教育学部では、教員養成をその目的としていない。そのため、卒業後の進路においても、教員になるものは若干名であり、多くは民間企業や国・地方自治体に就職する。また、15~20%くらいのものが大学院に進学する。今回研究の対象となった被調査者が所属する教育学部は、卒業後の進路に関して、以上のような特徴を有

する。

本研究では、これまでに以下の3つの尺度を実施した。  
 ①自己能力評価尺度(若林・和田・斎藤, 1987) : 職務能力に関する自己評価を測定する, 19項目の質問からなる。それぞれの項目に表されている能力が自分にどの程度そなわっているかを、「非常にそなわっている」から「まったく欠けている」の7段階で評定させた。  
 ②職業志向尺度(若林ら, 1987) : 就職や職業選択において学生が志向すると思われる28の事柄(条件)からなり、将来就きたいと望んでいる職業において、それぞれの事柄(条件)がどの程度そなわっていて欲しいかを、「非常にたくさんあってほしい」から「普通以下でよい」の5段階で評定させた。  
 ③職業適性評価尺度 : 今回新たに作成したもので、さまざまな業種からなる21の職業について、仮にその職業に就いたとしたら、どの程度うまくやっていく自信があるかを、「非常に自信がある」から「全く自信がない」の5段階で評定させた。この尺度は、各職業において必要とされるであろう能力と自己にそなわっていると思われる職務能力の相違を、自信という変数で表したものと考えることができよう。したがって、自信があると評定されるほど、必要とされるであろう能力よりも自己の能力のほうが上回っており、逆に自信がないと評定されるほど、必要とされるであろう能力よりも自己の能力が下回っていると考えていると見なすことができる。被調査者が、各職業においてどのような能力が必要とされるかと考えているかは直接測定していないが、先の自己能力評価との関連を見ることで、各職業に対して抱いている職業観(どのような職務能力が必要とされるかと考えているか)を間接的に検討することができるだろう。

以上3つの尺度のうち、今回報告するのは、初回の調査(1997年11月)において収集された自己能力評価尺度および職業適性評価尺度に関するデータである。

#### 結果と考察

##### 自己能力評価尺度

自己能力評価尺度は、若林・和田・斎藤(1987)で用いられたのと同じであり、各項目で表される職務能力は、「有能性」「協調性」「確実性」の3つに分類されると報告されている。そこで、自己能力評価尺度を構成する19項目に対し主成分分析(バリマックス回転)を行い、3つの主成分を抽出することで、その構造を比較してみた。その結果および各項目の平均と標準偏差は、Table 3-1のとおりである。ただし、回答に不備があった1名は以後の分析から除外した。

主成分分析の結果、若林らの報告している構造とほぼ

8) 執筆者 : 安藤直樹

大学生の適応過程に関する縦断的研究（1）

Table 3 - 1 自己能力評定尺度の主成分分析結果と各項目の平均値と標準偏差

項 目	主 成 分			平 均	標 準 偏 差	
	I	II	III			
<b>&lt;有能性&gt;</b>						
4. 人びとの心を動かし、一定の目標に向けてみんなの努力を結集させる能力。説得したり、指導したりして、みんなを引っ張っていく力。	.77	.05	.22	3.13	1.49	
10. 独特な発想に基づき、みんなと違った考え方や方法、独自のアイデアを生み出す能力。	.70	.20	-.34	3.80	1.74	
16. いろいろな意見や情報を統合し、何が問題か、これからどうすべきかについて、的確な判断を下せる能力。	.69	.33	.02	4.04	1.31	
7. ある企画を思いつき、その達成のためにいろいろ情報を集めたり、計画を立案する能力。	.68	-.05	.25	3.64	1.52	
1. 人前で物事を筋道だてて話す能力。また、自分の考えを要領よく人に伝える能力。	.60	.12	.21	3.71	1.40	
13. 自ら進んで自分をためす機会を求めたり、与えられた機会には積極的に挑戦する態度。また失敗を恐れず、未知の仕事に取り組むこと。	.50	.07	-.06	4.00	1.58	
9. 手早く物事をやりとげ、限られた時間内に最大の効率を発揮できる能力。	.50	.17	.29	3.87	1.51	
18. いろいろな人と接することを心がけ、広い人間関係を維持していく能力。外向的で社交性に富む態度。	.47	.44	.10	4.06	1.78	
15. 細かいところまで神経が行きとどき、物事に注意深いこと。	.39	.06	.33	4.00	1.46	
<b>&lt;協調性&gt;</b>						
2. 自分の感情を抑え、相手の気持ちになって考え、その人が何を欲しているかをよく理解する能力。	.11	.80	.14	4.21	1.42	
11. 相手の気持ちを察し、その人の気持ちになってふるまうことができる能力。どんな人にも親切で心のこもった対応ができる能力。	.17	.80	.05	4.16	1.34	
8. 他の人と強調し、お互いに助け合って仕事をやっていく能力。また、仲間から孤立したり、仲間との調和を乱したりしないこと。	.04	.75	.30	4.60	1.49	
5. いやなことがあっても、落ち込んだり感情的になったりせず、平常心を保って笑顔で対応できる能力。	.08	.73	-.02	3.73	1.60	
19. 問題が生じたとき、他の人と折衝したり話し合い、また、必要なときには説得したりお願いしたりして、問題の解決を促進する能力。	.46	.48	-.01	4.10	1.29	
14. 自分とは違った意見や方法でも拒否せず、それらを十分に検討し良いところは取り入れる能力。	.08	.46	.06	4.64	1.02	
<b>&lt;確実性&gt;</b>						
3. こみいった仕事をキチンと仕上げたり、いわれたことは期日までに確実にやりとげる能力。	.12	.25	.84	4.36	1.76	
6. 細かい仕事や、反復作業を長時間こつこつと行う能力。	-.10	-.01	.76	4.23	1.83	
17. 与えられた課題や、仕事内容を十分に理解し、責任をもってやりとげる能力。	.42	.16	.68	4.67	1.27	
12. タイプの違ういろいろな課題をテキパキと処理し、仕事の遅れや、やりっぱなしを作らないこと。	.52	.19	.58	3.64	1.38	
	2	乗	和	5.91	2.11	1.96
	寄	与	率	31.1	11.1	10.3

類似した構造を得られた。第Ⅰ主成分は「有能性」、第Ⅱ主成分は「協調性」、第Ⅲ主成分は「確実性」を表している。ただし、若林らの研究で「有能性」に分類されていた項目19が今回の分析では「協調性」へ、また「確実性」に分類されていた項目9と項目15が「有能性」へと変更されている点が異なっている。以下の分析では、今回得られた主成分分析の結果を用いる。

**職業適性評価尺度と自己能力評価尺度の関係**

自己能力評価尺度の主成分分析結果から、「有能性」「協調性」「確実性」を表すとされた各主成分について、各被調査者の因子得点を計算した。そして、それらの因子得点と職業適性評価尺度の21項目をあわせて、主成分分析（バリマックス回転）を行った。職業適性評価尺度は、各職業の適性に関する自己評価を表しており、自己

能力評価と重ね合わせることで、被調査者が各職業にどのような職業観をもっているか、各職業にどのような能力が必要とされると見なしているかを検討することができる。主成分分析の結果、および職業適性評価尺度における各項目の平均と標準偏差を、Table 3-2に示す。なお、「有能性」「協調性」「確実性」の3つの職務能力によって、被調査者がもつ職業観が最も説明しやすくなるように検討した結果、4つの主成分を抽出した。

「有能性」との関連が強かったのは、大学の先生、カウンセラー、医者、弁護士、会社経営者、ニュースキャスターであった。したがって、被調査者にとって、それらの職業は「有能性」が求められる職業として捉えられているといえよう。

「協調性」との関連が強かったのは、中学校・高校の

Table 3-2 自己能力評価と職業適性評価との関連（主成分分析結果）

項 目	主 成 分				平 均	標 準 偏 差
	I	II	III	IV		
20. 自動車セールス	.78	-.06	.13	.06	1.80	0.96
8. カメラマン	.71	.15	.05	-.16	2.23	1.22
21. 商品仕入れ係（バイヤー）	.70	.10	.25	-.03	2.13	1.08
15. ツアーコンダクター	.65	-.02	-.02	.25	2.34	1.13
13. 警察官	.52	-.11	.23	-.08	2.16	1.11
16. 国際線の客室乗務員	.52	.23	.17	.29	2.33	1.15
7. 新聞記者	.50	.22	-.22	.16	2.37	1.21
9. インテリアデザイナー	.48	.33	-.17	-.30	2.24	1.29
5. タレント	.34	.32	-.31	.19	2.07	1.17
<有能性>	-.02	.75	-.05	-.02		
3. 大学の先生	-.07	.65	-.01	.27	2.46	1.07
4. カウンセラー	.08	.63	-.06	.09	2.91	1.25
12. 医者	.16	.63	-.10	-.01	2.04	1.20
14. 弁護士	-.06	.58	.31	-.03	2.21	1.26
10. 会社経営者	.30	.46	.25	-.06	2.10	1.02
6. ニュースキャスター	.32	.46	.11	-.07	2.50	1.19
19. 公務員事務職	-.00	.01	.81	.17	3.37	1.04
18. 銀行員	.33	-.21	.66	-.21	2.77	1.11
<確実性>	.15	.17	.62	.03		
11. ホテルのフロント係	.37	.12	.42	.35	3.03	1.17
2. 中学校・高校の先生	-.27	.42	.27	.59	3.16	1.03
17. コンピュータプログラマー	.05	.41	.17	-.59	1.99	1.11
<協調性>	.22	.09	-.09	.53		
1. 小学校の先生	.02	.05	.39	.52	3.21	1.13
2 乗 和	4.67	2.82	2.30	1.66		
寄 与 率	19.5	11.7	9.6	6.9		

先生、小学校の先生であった。しかし、中学校・高校の先生には「協調性」とともに、「有能性」が必要とされると捉えているのに対して、小学校の先生には「確実性」が求められていると捉えており、小学校の先生と中学校・高校の先生とはその捉え方は異なっている。また、コンピュータプログラマーに関しては、「有能性」が必要とされるが、「協調性」は求められない職業として捉えているのは興味深い。

そして「確実性」との関連が強かったのは、公務員事務職、銀行員、ホテルのフロント係であった。これらの職業は、確実に物事をこなす能力が必要であると捉えられている。

最後に、第I主成分に負荷が高かった項目群であるが、これらの職業に共通する特徴を見出すのは難しく、「有能性」「協調性」「確実性」といった職務能力がどの程度必要とされるのか、それ以外の職業と比べて明確でないものが集まったのではないかと考えられる。

## 引用文献

- D'Angelo, E. 1971 *The teaching of critical thinking*. Amsterdam: B. R. Gruner.
- 藤井義久 1998 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検証 心理学研究, 68, 441-448.
- 橋本 剛 1997a 対人関係が精神的健康に及ぼす影響—対人ストレス生起過程因果モデルの観点から— 実験社会心理学研究, 37, 50-64.
- 橋本 剛 1997b 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, 13, 64-75.
- 久田 満・丹羽郁夫 1987 大学生の生活ストレス—測定に関する研究—大学生用生活体験尺度の作成—慶応大学大学院社会学研究科紀要, 27, 45-55.
- 久原恵子・井上尚美・波多野誼余夫 1983 批判的思考力とその測定. 読書科学, 131-142.
- Holmes, T. H. & Rahe, R. H. 1967 The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, 11, 213-218.
- 岩井勇児 1979 愛知教育大学学生の進路意識: I 愛知教育大学研究報告(教育科学), 28, 61-78.
- 岩井勇児 1980 愛知教育大学学生の進路意識: II 愛知教育大学研究報告(教育科学), 29, 83-100.
- 岩井勇児 1981 愛知教育大学学生の進路意識: III 愛知教育大学研究報告(教育科学), 30, 49-66.
- 岩井勇児 1982 愛知教育大学学生の進路意識: IV 愛知教育大学研究報告(教育科学), 31, 83-95.
- 岩井勇児 1984 愛知教育大学学生の進路意識: V 愛知教育大学研究報告(教育科学), 33, 77-90.
- Karasawa, M. 1991 Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effect on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30, 293-307.
- 笠原 嘉・山田和夫(編) 1981 キャンパスの症状群 弘文堂
- 神山貴弥・藤原武弘 1991 認知欲求尺度に関する基礎的研究. 社会心理学研究, 6, 184-192.
- Lave, J. & Wenger, E. 1991 *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge University Press. (佐伯胖 訳 1993 状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加 産業図書)
- Lehmann, I. J. 1963 Changes in critical thinking, attitudes, and values from freshman to senior years. *Journal of Educational Psychology*, 54, 305-315.
- 松崎 学・田中宏二・古城和敬 1990 ソーシャル・サポートの供与がストレス緩和と課題遂行に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 30, 147-153.
- 宮元博章・道田泰司・谷口高士・菊池聡(訳) 1996 クリティカルシンキング 入門編—北大路書房(Zechmeister, E. B. & Johnson, J. E. 1992 *Critical Thinking: A Functional Approach*. Wadsworth, A Division of International Thompson Publishing Inc.)
- 諸井克英 1986 大学新入生の生活事態変化に伴う孤独感 実験社会心理学研究, 25, 115-125.
- 中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本語版GHQ精神健康調査表手引 日本文化科学社
- 緒賀 聡 1991 大学生におけるソーシャルサポートと精神的健康に関する研究 カウンセリング研究, 24, 1-10.
- 大橋正夫・吉田俊和・坂西友秀 1982 大学における教師—学生の間関係(I) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 29, 279-297.
- 尾関友佳子・原口雅浩・津田 彰 1991 大学生の生活ストレス—コーピング、パーソナリティとストレス反応— 健康心理学研究, 4, 1-9.
- 嶋 信宏 1992 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7, 45-53.
- Suh, E., Diener, E., & Fujita, F. 1996 Events

- and subjective well-being: only recent events matter. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1091-1102.
- Takai, J. & Ota, H. 1994 Assessing Japanese interpersonal communication competence. *The Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 224-236.
- Turner, C. J. 1987 *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Blackwell. (蘭 千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美 訳 1995 社会集団の再発見 自己カテゴリー化理論 誠信書房)
- 續 有恒 1964 適性 中央公論社
- 和田 実 1998 大学生のストレスへの対処, およびストレス, ソーシャルサポートと精神的健康の関係—性差の検討— 実験社会心理学研究, 38, 193-201.
- 若林 満・和田 実・斎藤和志 1987 教育学部新入生の進路決定過程に関する4年間の追跡的研究(Ⅰ) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 34, 303-316.
- Wrightsmann, L. S. 1991 Interpersonal trust and attitudes toward human nature. In J. P. Robinson, P. R. Shaver, & Wrightsmann (Eds.), *Measures of personality and social psychological attitudes: Volume 1 of measures of social psychological attitudes*. San Diego: Academic Press. Pp.373-412.
- 矢倉久泰 1984 大学グラフィティ—データでみる大学生の“顔”— 世界, 463, 128-133, 岩波書店.
- 吉田俊和・坂西友秀 1984 大学における教師—学生の間関係(Ⅱ) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 31, 211-225.
- 吉田俊和・下村 勉 1989 三重大学教育学部新入生の意識調査 三重大学教育実践研究指導センター紀要, 9, 115-126.
- 吉崎一人・廣岡秀一 1994 新設学科カリキュラム評価に関する追跡的研究(1)—調査項目の予備的検討— 愛知淑徳大学「コミュニケーションと人間」, 3, 13-30.

(1999年9月16日 受稿)

## ABSTRACT

### A Longitudinal Study on the Adjustment Process of Undergraduates

Toshikazu YOSHIDA, Takeshi HASHIMOTO, Naoki ANDO, and Zentaro UEMURA

In order to effectively plan for and induce a drastically improved higher education program, it is essential to examine the socialization process of undergraduates. The purpose of this study was to investigate adjustment as a socialization process through a longitudinal study spanning the undergraduate program. Questionnaires were administered to 71 undergraduates majoring in education. In this article, we report the changes in attitude toward learning, acquisition of social skills, gaining life event experiences, changes in self-evaluated competence, and evaluation of job aptitude from freshman through sophomore years.

The principal findings were that: first, subjects generally held a better image of psychology than education, although while the latter remained constant, the former declined with time. Furthermore, while the tendency to favor a special subject decreased, subjects came to place more importance to part-time job and travel. Consistently, throughout the period interpersonal relationships were regarded as most important. Second, freshman gained many life event experiences, but there was much variance in these experiences for sophomores. There was also found a positive correlation between the social skills of interpersonal sensibility and gained events. Third, self-evaluated competence produced 3 factors labeled competence, interpersonal harmony and trustworthiness. Finally, the relationship between self-evaluated competence and evaluated job aptitude was discussed.

Key words: longitudinal study, attitude toward learning, life events, self-evaluated competence, evaluated job aptitude